

〈女房〉和泉式部の日記 — 敦道親王文化圏の形成と流布 —

石 坂 妙 子

『和泉式部日記』には、「故宮（為尊親王）」に導かれるように出逢った「女（和泉式部）」と「宮（敦道親王）」との、曲折に満ちた恋と同様の物語が綴られている。「宮」を惹きつけてやまない豊饒な和歌と、人称の交錯する自在な語り口で、「女」の内面を活写するこの日記には、あらかじめ「女」の心に沿って読むべき読解の磁場が形成されているといつてよいだろう。多くの研究が、「女」の人生の記念碑としての恋物語、「女」の世界観を反映した男女の物語、という作品の側面を強く注視してきたのも必然の動向だったといえる。

一方、「女」の恋の相手である「宮」（と「故宮」）にとって、彼らの事跡がこのような形で世間に流布することには、どのような意味があったのか。冷泉院の美しいこの二人の皇子たちについては様々な風評が飛び交っていて、周知のように『栄花物語』や『大鏡』などもそれに強い興味を示して丁寧に書き留めている。『和泉式部日記』の記事自体も、二人の皇子への世評を喚起する有力な媒体になっていったであろうことは、想像に難くない。また、書き手である「女」にとっても、日記の記事が世評を喚起する大きな力を持つことについては、既に織り込み済みであったと考えられる。『和泉式部日記』は、冷泉院の皇子たちについての有力な宣伝の書でもあった、ということを押さえておく必要がある。

夙に、『和泉式部日記』は、帥宮の死後、中宮彰子の許に出仕した和泉式部が、「主人筋から」帥宮との関係の真実を書くようにと要請されて書いたもので、『和泉式部日記』が描き出した「歌の力で身分を越えるほどの言葉の雅こそ、後宮やその後見役の貴族たちが、自分たちの栄華を飾る

ものとして、ぜひとも身边にちりばめたいものだったのである」とする、日記の執筆事情と流布に関する示唆に富む見解が提出されている。³この、〈女房〉である和泉式部の「主人筋」と世間を意識した日記作品の執筆という観点こそが、今後の『和泉式部日記』論の開拓につながると思われる。「女」の出仕生活を描いた宮邸内の物語が孕む重要な意義についても改めて考えてみたい。

一

長保五年の「十二月十八日、月いとよきほどなる」夜、「女」は「宮」に迎えられて宮邸に入る。作中で唯一日付が記されたことで注目を集めてきた記事である。特に、清少納言や紫式部の初出仕と同じ年末の出来事だけに、「女」の「新参女房のおめみえ」の日付を表したものの、とする指摘が重視される。宮邸入りは、〈女房〉和泉式部の誕生を意味するものであった。宮邸における式部の身分的位相は「さぶらふ女」である。和歌の力で「宮」を魅了し、自邸に通わせていた「女」から、「宮」に終日伺候する女房へと明らかに変身しているのである。和歌を詠むことはおろか、破格の待遇を受けて「北の対」へ移り住んだからは、「宮」と表立った対話をすることもなくなる。黙した彼女はどのように過ごしていたのか。

①宮もおはしますを見まゐらすれば、いと若うつくしげにて、多くの

人にすぐれたまへり。これにつけてもわが身恥つかしうおぼゆ。

②ことはてて宮入らせたまひぬ。御送りに上達部教をつくしてゐたまひて、御遊びあり。いとをかしきにも、つれづれなりしふる里まづ思ひ出でらる。

③かかるもいとかたはらいたくおぼゆれば、いかがはせむ、ただともかくもしなさせたまはむまにしがひて、さぶらふ。

④宣旨、「かうかうしてわたらせたまふなり。春宮の聞こしめさむこともはべり。おはしましてとどめきこえさせたまへ」と聞こえさわぐを見るにも、いとほしう苦しけれど、とかく言ふべきならねば、ただ聞きゐたり。

⑤聞きにききころ、しばしまかり出でなばと思へど、それもうたてあるべければ、ただにさぶらふも、なほもの思ひたゆまじき身かなと思ふ。

長保六年正月、冷泉院の拝賀に参列する廷臣のなかに「宮」の姿を「見まゐら」せて、その比類のない美貌に圧倒されるときに、「わが身」のみすばらしさを悔いている(①)。拝賀の式が終わり、宮邸で催された素晴らしい管弦の遊びを目の当たりにするにつけ、退屈だった里での日常が思い起こされる(②)。「宮」が「北の方」側の非寛容な対応に怒り、一層溝を深めていくにつけても心が痛むけれど、自らは為す術もなく「宮」に従うしかないと思う(③)。「北の方」が宮邸を退去する直前にも、口を差し挟む立場にない身としては、邸内の騒ぎを「見る」あるいは「聞きゐる」以外はないのだった(④)。周囲が悪意に満ちて騒然としているころ、進退もままならない宮仕えのなかで、自分の人生はどこまでも苦悩が尽きないのだと思う(⑤)。

沈黙のなかで、彼女はひたすら「宮」の姿を「見る」ことに徹して、その美しさを讃美している。冷泉院や帥宮邸の豪華さ、そこで繰り広げられる行事や宴の華やかさを、自分の里のつましとの対比によって描き出す。「宮」と「北の方」、「北の方」と「御姉」などの主人筋とその周辺の人々の動静を、近くで逐一見聞している。一方で、自分は憂愁から逃れられない身の上なのだ、という人生観を噛みしめざるをえない。それが宮邸

に暮らす「女」の特徴的な姿なのである。この「見る」ことに徹する女房、主人筋への讚美の視線を保持する女房、憂愁の人生観を抱えた女房、という特性を『和泉式部日記』の「女」に見出す時、かの『紫式部日記』との類似性に驚かすにはいられない。一条天皇の中宮彰子に仕えた「女房」紫式部は、女主人の二回の慶事、敦成親王と敦良親王の御産に立ち合い、道長一族の栄華に輝く時代をその傍らで見届けた。彰子を始め主人筋の人々への讚辞を惜しみなく綴る、その一方で、土御門邸と比べて故郷の家にあるのは「見どころもなき古里の木立」であると嘆き、女房として出仕したばかりに権門との身分差を実感させられ、「残ることなく思ひ知る身の憂さ」を噛みしめざるを得なかったという。紫式部はそのような体験を経て、主人筋の慶事を徹底して「見る」女房から、見聞した世界を「ものいひさがなく」語り伝える女房へと転身していった。⁽¹⁰⁾『紫式部日記』はその大いなる成果である。紫式部に宿った語り伝える使命感の背後に、道長一族の強い意向があったことはいうまでもない。

『和泉式部日記』に宮邸譚が存在することの最も大きな意義は何か。さまざまな評価があるものの、「女」が紛れもなく「女房」になったこと、それも、例えば紫式部にも通じるような、語り伝える意欲に溢れた典型的な「女房」に転身したこと、その事実を証し立てる物語として存在するということが、何よりも重要なことではないだろうか。宮邸に出仕する直前、自らの死を予感する不吉なことを吐露する「宮」に、「呉竹の世々のふるごと思ほゆる昔がたりはわれのみやせむ」と詠みかけ、長い間語り継がれる「昔がたり」にも匹敵する私たちの関わりは私ひとり伝えてゆくのですか(心細いことはおっしゃらないで下さい)、と訴えるところがある。それこそが「女」の詠んだ最後の和歌である。これは、二人の稀有な関係を「昔がたり」として後々まで語り伝える意向を明示したひとつの宣言であり、日記執筆に関わる有力な表現であると見られてきた。⁽¹¹⁾何より注目されるのは、「宮」の恋人として和歌を詠むその最後の瞬間が、これまでの恋物語を総括した「女」が新たに表現者として立ち上る契機を示唆するかのような、絶妙な構成になっていることである。行動する恋人の終焉は、「見る」女房そして「語る」女房への始発でもあった。

二

冷泉院の皇子、為尊親王と敦道親王は、藤原兼家の娘超子を母として生まれた。幼い頃から祖父兼家の寵愛と手厚い庇護を受けて育ったという。

兼家が亡くなると、長男道隆が皇子たちの後見役を務めるようになる。敦道親王の最初の結婚相手が道隆三女で、その結婚が道隆主導によるものであったのは、無理もないことだった。その道隆が四十三歳で薨じたのち、敦道親王の庇護者は時の右大臣道長となる。敦道親王の生活圏は常に兼家一族とともにあり、その命運は兼家一族に握られていたといつてよい。

兼家一族の周辺では、後世に残る文学作品が、有能な女性作家の手によって次々と生み出されている。兼家の結婚生活は妻道綱母が『蜻蛉日記』に書き残し、道隆と娘定子の栄華は女房清少納言が『枕草子』に纏め上げ、中宮彰子と父道長の栄耀を言祝いで女房紫式部が『紫式部日記』を執筆したのは、余りにも有名である。兼家・道隆・道長という、時の権力者にして祖父・伯父・叔父の血縁に繋がれた人々が形成する文化圏の一員で、東宮候補とも目されていた敦道親王に、彼を讃美する『和泉式部日記』なる作品が残されていても少しも不思議ではないのである。

作中の「宮」はどのように描かれているのか。その様相を確認してみると、(1) 高貴性、(2) 人間性、(3) 美貌、(4) 歌才、という四つの資質への讃美が際立っていることが分かる。

(1) については、「宮」自身が「古めかしう奥まりたる身」「かろがろしき御歩きすべき身にてもあらず」「もとよりかかる歩きにつきなき身」などと、自由な外出の許されない特別な身の上を繰り返し強調することでもかろがろしう、おぼしつむ」という当代随一の権力者たちの思惑を憚る配慮を示すことで皇位継承の可能性も否定できない微妙な立場を暗示している。侍従の乳母の「世の中は今日明日とも知らず変はりぬべかめるを、殿のおぼしおきつることもあるを、世の中御覧じはつるまでは、かかる御歩きなくてこそおはしまさめ」という進言などは、言われるように、東宮

候補への可能性を強く示唆する言説であろう。この貴種性こそが「宮」という存在を差異化する最も重要な属性であり、語り伝えるにふさわしい主人公の資格をもたらす要諦だったと考えられる。

(2) の感性豊かな人間性については、既述の確な指摘があるように、身分差などに拘泥せず「女」の孤独や苦悩に思いを及ぼして、絶えず「おぼつかなし」「いかが」「心苦し」と「女」を気遣う「やさしき宮」の姿に顕現している、といえよう。この「やさしき宮」像は「女」の理想を反映したものであることは明白だが、読者つまりは『和泉式部日記』を享受する人々にも理想的男性と映ることが十分に企図されていると考えられる。

(3) の美貌は、「をかし」「なまめかし」「めでたし」「うつくしげ」と「女」から絶賛され、「作中の女は、宮を物語の男君と見ている」とまで評されるような、現実を超えた美質として描かれている。それは、「女」に「わが身」の衰えを意識させずにはおかぬ卓越した美しさであった。

年かへりて正月一日、院の拝礼に、殿ばら数をつくして参りたまへり。宮もおはしますを見まゐらすれば、いと若うつくしげにて、多くの人にすぐれたまへり。これにつけてもわが身恥づかしうおぼゆ。

宮邸に出仕して迎えた正月、冷泉院に拝礼する多くの廷臣のなかに、際立つ美貌の「宮」を発見し、不釣り合いな自分を悔やんでいる「女」の姿がある。それは、既に述べたような主家を讃美する紫式部のあり方に通じる《女房》の視点であると同時に、『蜻蛉日記』の道綱母の次のような姿を彷彿とさせるものでもある。

日暮れぬと見ゆるほどに、「明日、春日の祭なれば、御幣出だし立つべかりければ」などで、うるはしうひき装束き、御前あまた引きつれ、おどろおどろしう追ひちらして出でらる。……まして見苦しきこと多かりつると思ふこち、ただ身ぞ憂じはてられぬるとおぼえける。

天禄三年二月のこと、権大納言に昇進して心身ともに充実した兼家が、立派な装束を着用して大勢の家来を引き連れ我が邸から去っていく様子を見ていた道綱母は、老いて緊張感を欠き普段着姿でいた自分に夫はあきれ果てているにちがいないと失態を後悔する。

単純な比較は避けなければならないが、貴族社会の上層にある対象を「見る」立場の人間が、わが身の位相の低さを美貌の差異を通して認識する、という表現方法には通底するところがある。対象への讚美とわが身への卑下が絡まり合う特徴的表現である。優れた高貴な男性と関わる女性に宿命づけられた嘆きの表現を、『蜻蛉日記』と『和泉式部日記』は共有しているといえよう。

(4)の歌才こそは、「宮」への讚美の中核ともいふべき特性である。「宮」の歌才は、「女」と贈答する時宜に適した詠歌の数々によっても証明されているが、「女」の和歌とその歌人としての資質を評価する言説において、最も鮮烈な印象を残すといつてよい。

①「今宵の雨の音は、おどろおどろしかりつるを」などのたまはせたれば、

「夜もすがらなにごとをかは思ひつる窓うつ雨の音を聞きつつ
かげにゐながらあやしきまでなむ」と聞こえさせたれば、なほいふか
ひなくはあらずかしとおぼして、御返り、

われもさぞ思ひやりつる雨の音をさせるつまなき宿はいかにと

(五月)

②ありつる御文見れば、

われゆゑに月をながむと告げつればまことかと見に出て来てにけり

とぞある。「なほいとをかしうもおはしけるかな。いかで、いとあやしきものに聞こしめしたるを、聞こしめしなほされにしがな」と思ふ。宮も、言ふかひなからず、つれづれの慰めにはおぼすに、(五月)

③御文ある。見れば、ただかくぞ、

思ひきや棚機つ女に身をなして天の河原をながむべしとは

とあり。さはいへど、過ぎしたまはざめるはと思ふも、をかしうて、ながむらむ空をだに見ず棚機に忌まるばかりのわが身と思へばとあるを御覧しても、なほえ思ひはなつまじうおぼす。(七月)

④宮の御文なりけり。思ひがけぬほどなるを、「心や行きて」とあはれにおぼえて、妻戸押し開けて見れば、

見るや君さ夜うちふけて山の端にくまなくすめる秋の夜の月
うちながめられて、つねよりもあはれにおぼゆ。門も開けねば、御使
待ち遠にや思ふらむとて、御返し、

ふけぬらむと思ふものから寝られねどなかなかれば月はしも見
ず

とあるを、おしたがへたる心地して、「なほ口惜しくはあらずかし。
いかで近くて、かかるはかなしごととも言はせて聞かむ」とおぼし立つ。

(十月)

⑤前近き透垣のもとに、をかしげなる檀の紅葉のすこしもみちたるを、
折らせたまひて、高欄におしかからせたまひて、

言の葉ふかくなりけるかな

とのたまはすれば、

白露のはかなくおくと思しほに

と聞こえさするさま、なさけなからずをかしとおぼす。

(十月)

和歌によって人々を魅了する世にも聞こえた「女」の力に臆することなく、贈答の妙を味わい尽くして、「宮」は「なほ言ふかひなくはあらずかし」(①)、「言ふかひなからず」(②)、「なほえ思ひはなつまじうおぼす」(③)、「なさけなからずをかし」(⑤)と、「女」を高く評価する。遂には、「なほ口惜しくはあらずかし。いかで近くて、かかるはかなしごととも言はせて聞かむ」(④)と、自邸に引き取ろうと決心する契機とさえしている。「女」の歌才をその人間性の高さにまで昇華させて捉える「宮」に、『和泉式部日記』は最大限の讃辞を惜しまない。「女」の歌才に惹かれその本質を理解することが、「宮」の稀有な歌才を証明することに繋がる、まさに讚美の二重構造ともいふべき多義性が、この作品の特徴となっている。

「宮」の審美眼の発露のなかでも、「女」の歌才に絶対的な信頼を置くエピソードがある。それは「女」への代詠の依頼である。

かくて、晦日がたにぞ御文ある。日ごろのおぼつかなきなど言ひて、「あやしきことなれど、日ごろもの言ひつる人なむ遠く行くなるを、あはれと言ひつべからむことなむひとつ言はむと思ふに、それよりのたまふことのみなむさはおぼゆるを、ひとつのたまへ」とあり。あな

したり顔と思へど、「さはえ聞こゆまじ」と聞こえむも、いとさかしければ、「のたまはせたることはいかでか」とばかりにて、

「惜しまるる涙にかげはとまらなむ心も知らず秋は行くとも
まめやかにはかたはらいいたきことにもはべるかな」とて、端に、「さても、

君をおきていづち行くらむわれだにも憂き世の中にしひてこそふれ」

とあれば、「思ふやうなりと聞こえむも、見知り顔なり。あまりぞおしはかり過ぐいたまふ、憂き世の中とはべるは。

うち捨てて旅行く人はさもあらばあれまたなきものと君し思はばありぬべくなむ」とのたまへり。(九月)

ほかの恋人が遠路旅立つに際して、深い感動を覚えるような歌を贈った。については、あなたからの歌のみが「あはれ」と感じられるものだから、私に代わって詠んで欲しい。私の心を打つ歌詠みはあなたひとり、と並み居る歌人を退ける物言い「宮」は「女」を称揚する。そして依頼した和歌の出来栄えについて「思ふやうなりと聞こえむも、見知り顔なり」と遠慮しつつも、和歌に精通することへの自負をほめかす「宮」の姿を描いている。和歌の詠者としてはもちろんのこと、和歌の評者としても優れた存在であったということを、『和泉式部日記』は繰り返し伝えているのである。

三

『和泉式部日記』は、流布間もない頃、どのように享受されていたのだろうか。貴重な例証として、『古本説話集』「六 帥宮通和泉式部給事」を挙げてみよう。

今は昔、和泉式部がもとに、帥宮通はせ給けるころ、久しく音せさせ給はざりけるに、その宮に候ふ童の来たりけるに、御文もなし。帰りまいるに、

待たましもかばかりこそはあらましか思ひもかけぬ今日の夕暮

持てまいりて、まいらせたりければ、「まことに久しく成にけり」と心苦しくて、やがておはしましけり。女も、月をながめて端に居たりけり。前栽の露きら／＼と置きたるに、「人は草葉の露なれや」とのたまはするさま、優にめでたし。御扇に御文を入れて、「御使の取らでまいりにければ」とて、たまはす。扇をさし出だして取りつ。「今宵は帰りなん。明日、物忌といふなりつれば、なからむもあやしかるべければ」とのたまはすれば、

心みに雨も降らなん宿過ぎて空行月の影やとまると
聞こえたれば、「あがこひや」とて、しばし上りて、こまやかに語らひをきて、出でさせ給とて、

あぢきなく雲居の月にさそはれて影こそ出づれ心やは行
有つる御文を見れば、

われゆえに月をながむと告げつればまことと見に出でて来にけり

何事につけても、をかしうおはしますに、あは／＼しき物に思はれまいらせたる、心憂くおぼゆと、日記に書きたり。

はじめつ方は、かやうに心ざしもなき様に見えたれど、後には、上を去りたてまつらせ給て、ひたぶるにこの式部を妻にせさせ給たりと見えたり。

長い引用になったが、これが日記に関する全記述である。四月の出来事と五月(あるいは六月)の出来事を融合させた形で、日記の原文が紹介されている。

この『古本説話集』の記事によれば、『和泉式部日記』は贈答歌を中心とした歌物語的「日記」であり、「帥宮」と「和泉式部」との結婚を描いた作品である、ということになる。冒頭の「和泉式部がもとに、帥宮通はせ給けるころ」という表現には、結婚に至る男女の関わりを示唆する含みが感得されるし、「この式部を妻にせさせ給たりと見えたり」と結ぶ末尾には、宮邸での同棲をひとつの結婚の形と見る認識が表明されている。さらに注目されるのは、『古本説話集』が『和泉式部日記』を、帥宮を主体とする彼の事跡を描いた作品として享受している事実である。同時代にお

いて、『和泉式部日記』を結婚に至る男女の物語であると解釈し、帥宮の人生に照準を合わせてその作品を読む、という享受の仕方があったという例証は、今日の『和泉式部日記』研究に新たな視座をもたらすものと思われる。

四

『和泉式部日記』を「宮」の物語として読むとすれば、『古本説話集』が示唆するように、それは「宮」の結婚史に関する逸話となるだろう。周知のように、敦道親王は、最初藤原道隆三女と結婚し間もなく別れている。次の結婚相手が藤原済時二女で現在の「北の方」である。敦道親王の結婚に関する世間の関心は高く、『栄花物語』¹⁶『大鏡』¹⁷などが詳細に伝えるところである。

最初の結婚相手、道隆二女はどのような女性だったのか。

三の御方みながなかにすこし御かたちも心さまもいと若うおはすれど、さのみやはとて、帥宮にあはせたまつらせたまひつ。宮の御心ざし世の御ひびきわづらはしう思されたれば、あはれなり、わが御心ざしはゆめになし。殿もことわりに、とりわき思し見たてまつらせたまふ。されど南院に迎へたてまつらせたまひぬれば、あべきかぎりにておはします。
 (『栄花物語』「みはてぬゆめ」)

三の御方は、冷泉院の四の皇子、帥宮と申ししをこそは、父殿婿どりたてまつらせたまへりしも、後には、やがて御仲絶えにしかば、末の世は、一条わたりにいとあやしくておはするとぞ聞こえたまひし。まことにや、御心ばへなどの、いと落ち居ずおはしければ、かつは、宮もうとみ聞こえさせたまへりけるとかや。客人などのまゐりたる折は、御簾をいと高やかに押しやりて、御懷をひろげて立ちたまへりければ、宮は御面うち赤めてなむおはしましける。さぶらふ人も、面の色違ふ心地して、うつぶしてなむ、立たむもはしたに、術なかりける。宮、後には、「見返りたりしままに、動きもせられず、ものこそ覚え

ざりしか」とこそ仰せられけれ。

また、学生ども召し集めて、作文し遊ばせたまけるに、金を二三十両ばかり、屏風の上より投げ出だして、人々うちたまければ、ふさはしからず憎しとは思はれけれど、その座にては饗応し申してとり争ひけり。「金たまはりたるはよけれども、さも見るしかりしものかな」とこそ今に申さるなれ。人々文作りて講じなどするに、よしあし、いと高やかに定めたまふ折もありけり。二位の新発の御流にて、この御族は、女も皆、才のおはしたるなり。
 (『大鏡』「道隆伝」)

これらの歴史物語が伝える「宮」の一番目の妻の姿は、容姿・性格ともに「若う」未熟なうえに、行動にも「落ち居ず」不安定なところのある、伴侶と頼むにふさわしくない女性だったらしい。客人を前に胸も露わな立ち姿を披露したり、宮が学生たちを招集して詩作の会を催した折、多くの砂金を人々に投げ与えたり、漢詩の優劣を声高に判定するような、当時の女性としてはありえないほど奇矯な振る舞いをする人物だといっているのである。実は『和泉式部日記』にも詩作の会を話題にした記事がさりげなく入っている。

御文あり。「おぼつかなくなりければ、参り来てと思ひつるを、人々文つくるめれば」とのたまはせられたれば、いとまなみ君来まさずはわれ行かむふみつくるらむ道を知らばやをかしとおぼして、

わが宿にたづねて来ませふみつくる道も教へむあひも見るべく十一月に入ったころの何気ない日常のひとつと見えるが、『大鏡』「道隆伝」の伝えるような人口に膾炙する道隆三女の哀れにも見苦しい逸話を知っていたなら、『和泉式部日記』に点描された、贈答歌を媒介にしてより深い絆を結んでいく「宮」と「女」の姿が、この上なく理想的な男女の関係と映るのは必至であったと考えられる。

さて、次の結婚相手済時二女の世評はどのようなものだったのか。小一条の中の君と聞ゆるは、宣耀殿の御弟の君、殿も上も、ともかうもなさでうせたまひにしかば、いかで女御殿に劣らぬさまのことをなご思しかまへて、東宮の御弟の帥宮に聞えつけたまへりしかば、南院

に迎へたまへりしかど、年月に添へて御心ざし浅うなりもていき、和泉守道貞が妻を思し騒ぎて、この君をばことのほかに思したりしかば、居わづらひて、小一条の祖母北の方の御もとに帰りましたまひにしぞかし。されば東宮も、宣耀殿も、「このことをわが口入れたらましかばいかに聞きにくからまし。知らぬことなれば、心やすし」とぞ思しのためはせける。御幸ひ同じ御はらからと見えたまはず。和泉をば、故彈正宮もいみじきものに思はしたりしかば、かく帥宮もうけとり思すなりけり。故関白殿の三の君帥宮の上も、一条わたりに心得ぬ御さまにてぞおはする。また小一条の中の君も、いかがとぞ人推しはかりきこゆめる。

『栄花物語』「はつはな」

いま一所の女君は、父殿うせたまひにし後、御心わざに、冷泉院の四の親王、帥宮と申す御上にて、二三年ばかりおはせしほどに、宮、和泉式部に思しうつりにしかば、本意なくて、小一条に帰らせたまひにし後、この頃聞けば、心えぬ有様の、ことのほかなるにてこそおはすなれ。

『大鏡』「師伝」

二番目の妻済時二女は、両親の死後、姉で東宮の女御宣耀殿に劣らない結婚をしたいと対抗心を燃やし「思しかまへて」、「御心わざに」自ら積極的に画策して、東宮の弟である「宮」の妻になった、といわれる自己主張の強い行動派の女性である。宮邸に迎えられたが宮の愛情は長続きしなかったらしい。東宮や姉宣耀殿女御との折り合いも思わしいものではなかった。プライドばかりが高く、周囲の人々と心を通わせることが苦手な人柄だったのだろう。和泉式部の出現によって「宮」との結婚が破綻した、という事実が最も世間の興味関心を引く事柄だったという。

『栄花物語』『大鏡』も話題にする、宮が最後に愛した女性和泉式部について、「宮」自身はどのように評価していたのか。『和泉式部日記』が伝えるところによれば、「宮」は「女」のことを「言ふかひなからず」、「口惜しくはあらず」と繰り返し評価している。殊に、意表をつく発想で打てば響くような優れた和歌を詠み贈ってくるその歌才に強く惹かれていたことは、先に述べた通りである。¹⁹この歓喜にも似た「宮」の感懐は、第一の

妻道隆三女にも第二の妻済時二女にも向けられることのないものであった。「御心ざしはゆめになく」、「御面うち赤め」ざるを得ない恥を見させられたり、無防備に学才を誇ったりする道隆三女や、「心づきなし」と非難される済時二女「北の方」と比較するなら、明らかに「女」の優位は際立っている。²⁰敦道親王結婚史のなかで、『和泉式部日記』は宮の最後のしかも理想的な男女関係を描いた作品という評価が補強されるのである。そこには、宮の紛れもないひとつの幸福の形が象られている。不幸な結婚史を覆す宮の逸話、という享受を許容する要素を『和泉式部日記』は内包しているのである。

さて、『和泉式部日記』が世に広めたもののなかに「北の方」説話ともいべき逸話がある。『栄花物語』「はつはな」が伝えるところによれば、済時二女が「和泉守道貞が妻」に気圧されて宮邸を退去した時、東宮も姉宣耀殿もこの結婚に「わが口入れたらましかばいかに聞きにくからまし。知らぬことなれば、心やすし」と言ったという。ところが、『和泉式部日記』の「北の方」と「御姉」の関係は次のように描かれる。

北の方の御姉、春宮の女御にてさぶらひたまふ、里にものしたまふほどにて、御文あり。「いかにぞ。このごろ人の言ふことはまことか。われさへ人げなくなむおぼゆる。夜のまにもわたらせたまへかし」とあるを、かからぬことだに人は言ふとおぼすに、いと心憂くて、御返り、「うけたまはりぬ。いつも思ふさまにもあらぬ世の中の、このごろは見苦しきことさへはべりてなむ。あからさまにも参りて、宮たちをも見たてまつり、心もなぐさめはべらむと思ひたまふる。迎へにたまはせよ。これよりも耳にも聞き入れはべらじと思ひたまへて」など聞こえさせたまひて、さるべきものなどとりしたためさせたまふ。

(一月)

「北の方」の宮邸退去は、小一条邸に里下がりをしていた「御姉」が妹の窮状を思いやって、一族の誇りがこれ以上失われないうちに帥宮邸から救い出そうとする策を講じた結果である、というのである。ここには、春宮との間に儲けた姉女御の「宮たち」を慈しんで傷ついた心を慰めようとする、家族に守られた「北の方」の姿がある。『栄花物語』が伝える一

族に突き放されて生きる姿と対極に位置するともいふべき「北の方」像である。実のところ、『和泉式部日記』に登場する「北の方」は、「宮」との仲は既に冷え切っているものの、断りもなしに「女」を邸に迎え入れたことに對しては「泣く泣く」「身の人げなく人笑はれに恥づかし」と妻の誇りを賭けて抗議し、夫の訪れがますます遠のいてしまったことを「おぼし嘆」き、宮邸退去を決心した時は「こなたへもさし出でたまはぬも苦しうおぼえたまふらむ」と夫の心を氣遣う配慮も見せ、退去するに当たっては「さりげなく」しかももの静かに「宮」の車提供の申し出を拒絶する、という矜持に満ちた貴女の面影を漂わせる女性なのである。『和泉式部日記』が世の中に流布した「北の方」は、知る限り最も人間味溢れる誇り高い女性であるといえよう。たとえ、間接的に「女」の優位をほめかす記述を周到に繰り入れているとしても、直接的な「北の方」批判は「宮」に任せ、語り手の「女」は静かに事の推移を見守っているのみなのである。「女」には「北の方」を裁くような視点は無い。そのため、誰も伝えなかったような「北の方」の内面、退去に追い込まれた妻の悲しみと手放すことのなかった矜持を客観的に描き出すことが出来たのだといえよう。それは、「北の方」自身にはもちろんのこと、結婚相手の「宮」にも、「姉女御」(や春宮)にとつても、後世に残すには望ましい逸話ということになる。『和泉式部日記』は、「故宮」、「宮」と「女」、「北の方」と「姉女御」のいずれの人々に対しても、好意的視線を崩さない作品である。その点にこそ、主家敦道親王一族への配慮に満ちた「女房」和泉式部の姿勢が垣間見えるように思われる。

五

『和泉式部日記』をめぐる流布と享受の土壌には、恋多き高名な女性歌人である和泉式部個人の『日記』への興味、というだけではない何かがあったのではないか。その何かは、「女房」和泉式部の視点で書かれた作品、という定義を『和泉式部日記』に当て嵌めた時に、初めて鮮明に見えてくる。『古本説話集』がそれをほとんど『敦道親王集』であるかのように読

み、全体を「帥宮」の結婚と解釈したように、世間では『和泉式部日記』を「宮」の物語として享受する傾向が見られる。それは、『栄花物語』や『大鏡』が流布する貴人譚を読むような享受の仕方だといえよう。敦道親王に關していえば、『和泉式部日記』は、他の作品の追隨を許さないまでに彼への讚美の視点で描かれた、その比類のない人間像を提示する作品、ということになる。そこに、歌人和泉式部を魅了する感性を持つ有能な歌人の面影を宿す敦道親王の姿が刻印されていることは、いうまでもない。和歌的雅を体現する敦道親王、身分差を超えて「女」と「同じ心」で結ばれる恋の王者としての敦道親王、そのような他の誰にも描くことの出来ない帥宮の姿を造形している、という自信が書き手の「女」にはあっただろう。「宮」が輝けば輝くほど「宮」に愛された「女」の存在も光を放つ、という構造があることは、既に述べたところである。世評を喚起する対象はあくまでも敦道親王とその一族であり、王朝文化の粋は和歌的雅と恋の精神であることを充分に自覚したうえで、『和泉式部日記』は書かれ流布していった、と思われる。

『和泉式部日記』について、『枕草子』や『紫式部日記』にも通じるような、主家讚美の精神を持つ「女房」和泉式部の視点で描かれた作品である、と規定するのは無謀だろうか。「女房」和泉式部とは、主家の素晴らしさを後世まで語り伝えようとする意欲に溢れた存在である。そのように考えれば、歴史物語的享受を許容し、しかも他の歴史物語を遙かに凌駕する「帥宮」の世界を描き出して、「敦道親王文化圏」を構築し流布して見せたというような、『和泉式部日記』の新たな功績が見えてくるのである。「女」が見事なまでに「女房」に転身した宮邸の物語が、意外なほど作品の世界観を読み解く鍵となることを反芻してみたい。

注

(1) 拙稿「『故宮』の影―恋の支柱―」(『平安期日記文芸の研究』 平成九・一〇 新典社) 参照。

(2) 藤岡忠美「和泉式部伝の修正―為尊親王をめぐる―」(『文学』

一九七六・一一)は、『和泉式部日記』の記事が『栄花物語』などへ影響を及ぼしていると指摘する。

(3) 清水好子『和泉式部』(一九八五・三 集英社) 参照。

(4) 本文の引用は、藤岡忠美校注・訳『和泉式部日記』(新編日本古典文学全集 小学館)に拠る。以下同じ。

(5) 清水好子(3) 参照。

(6) 拙稿「対話不在の構図」(『平安期日記文芸の研究』 平成九・一〇 新典社)において、『和泉式部日記』が「貴族社会の周縁にある女房の視点を内在」した作品であると論じたことがある。

(7) 拙稿「宮邸の日々―変貌する日記世界」(『平安期日記文芸の研究』 平成九・一〇 新典社) 参照。

(8) 拙稿「紫式部の位相―「見る」女房」(『平安期日記文芸の研究』 平成九・一〇 新典社)において、女房の典型的属性としての「見る」視線の意義を論じた。

(9) 本文の引用は、中野幸一校注・訳『紫式部日記』(新編日本古典文学全集 小学館)に拠る。以下同じ。

(10) 拙稿「ものいひさがなき」紫式部―「見る」女房の行方」(『平安期日記文芸の研究』 平成九・一〇 新典社) 参照。

(11) 森田兼吉「III 帥宮敦道親王と和泉式部」(『和泉式部日記論攷 第二』 昭和六三・九 笠間書院)は、『和泉式部日記』が、世間の誤った「世語り」を「訂正し、真実の恋愛生活を世間に知らせるために、帥宮に代わって式部が綴った「呉竹の世々の古言おもほゆる昔語り」であった、と説く。

(12) 森田兼吉「I 帥宮敦道親王」(『和泉式部日記論攷 第二』 昭和六三・九 笠間書院) 参照。

(13) 伊藤博「帥宮造型」(『和泉式部日記研究』 一九九四・五 笠間書院) 参照。

(14) 伊藤博(13) 参照。

(15) 本文の引用は、中村義雄・小内一明校注『古本説話集』(新日本古典文学大系 岩波書店)に拠る。

(16) 本文の引用は、橘健二・加藤静子校注・訳『大鏡』(新編日本古典文学全集 小学館)に拠る。以下同じ。

(17) 本文の引用は、山中裕・秋山虔・池田尚隆・福長進校注・訳『栄花物語』(新編日本古典文学全集 小学館)に拠る。以下同じ。

(18) 清水好子(3)は、当時の会話であった歌の才能を宮が認めて「いかで近くて、かかるはかなしごとくも言はせて聞かむ」との思いを抱いたのは、女が「帥宮たちの生活圏にはいることを許された」証しであると説く。

(19) 「宮」と「北の方」との関係が「心づきなし」と互いに非難し合う不毛なものと描かれる意味については、拙稿「宮邸の日々―変貌する日記世界」(『平安期日記文芸の研究』 平成九・一〇 新典社)で論じたことがある。

(20) 森田兼吉(11)は、「帥宮の場合、相手側からの働きかけで二度結婚し、その両方に失敗している。道隆の三の君も、落時の中の君も、気が強く、わがままであった。もっとあたたかく、やわらかく自分を包み込んでくれる、母のような、姉のような女性に心をひかれやすかったであろう。」と推し量っている。